

留学報告書

社会基盤学専攻 1年 内田聖菜

アカデミック

主に研究を目的として留学に行ったが、授業も取った。

もともと留学に行こうと思ったのは研究のためだった。ただ授業を取るだけでは日本とはあまり変わらないかと思ったので留学先で研究をしようという目的で留学を決意した。

RMIT 大学に留学先を決めたのもそのためだ。そもそも東大の指導教員の先生が RMIT 大学に知り合いの先生がいるというので、そのつてを頼りに RMIT でも指導してもらえると考えたのが理由の一つである。もう一つとして、RMIT にはリサーチ交換留学制度があり、その制度を使えば授業を取らなくて済み、研究に専念できるからだ。(オーストラリアでは学生ビザだと 3 つ以上授業を取らなくては行けないが、リサーチ交換留学だと学生ビザでなく、研究ビザのようなものを発行できるから)

しかし、実際に応募してみると、リサーチ交換留学の指導教員を RMIT 大学が探すのに時間がかかり、新学期に間に合わないということで普通の交換留学生として交換留学をすることになった。

しかしそれでも研究を何とかしてしたかったので、先生の知り合いの先生に連絡をしたり、ホームページで RMIT の教授の研究内容を調べて自分と似ている分野の先生を端から探してメールを送っていったりということを繰り返していった。返信をくれない教授も多くいる中で返信をくれた教授にはより細かい研究計画書を送ったり、より具体的な議論をしたりと出国前にできる限りの準備をした。

しかし細かい研究計画を見せると実際には分野が少し違ったりするなど、本当に指導できるかわからないと言われるなど、指導教員探しに手間取っていた。

RMIT について、最初のオリエンテーションの期間で、履修授業の相談などを行ってくれる教授などが控えていたのでその何人かに研究をしたい旨を相談し、どの授業がいいか、指導教員は誰がいいかなどを相談した。

その先生方はとても親身に相談に乗ってくださり、指導教員を 2 人探してくれ、私は半年間その 2 名の指導教員の先生にお世話になることになった。

また、取らなくては行けない授業に関しても、研究に重きを置きたいと相談したら、どういう授業ならいいのかを一緒に考えて下さり、結局以下の 3 つの授業を取るようになった。GIS Fundamental, Integrated Transport System, and WorkPlacement.

GIS、ITSは私の研究と分野が近く、またITSの担当教授が私の指導教員でもあった。ITS自体は課題などがたくさんありかなりウェイトの重い授業だが先生は私に研究に沿った特別課題を出してくださり、授業のことではなく、研究をしていれば課題も提出できるという環境を整えてくださった。また3つ目のインターンは、インターンとしてRMITのCURという研究機関で研究者としてインターンをしているという前提にして、そこで自由に研究を行った。そのため、多少の報告などはあったが基本的に定期的に講義に出たりする必要はなく、自分の研究を行っているそのこと自体がインターンをしているということになり、とても効率的に研究をすることができた。

研究に関しては、2人の指導教員がいたが、トータルで1~2週間に1回ほどミーティングを行っていた。鉄道と都市の関係の研究を行っていたが、最初の3か月くらいは毎回毎回教授に日本とオーストラリアの鉄道は違うのだといわれ、Research Questionを明確に、具体的にするように言われた。

また、自分の研究ではRMITの提携しているオーストラリアの学会誌などからオーストラリアの鉄道に関する論文を大量に読むことができ、日本でできるだけ調べた既往研究とは比べ物にならないほどしっかりした先行研究の分析ができたし、またデータを集める際も、州立図書館に行って古いデータを探したり、あるいは鉄道局や政府に電話をかけ、インターネットにないデータについて聞いたりしていた。

こういったことは日本ではできないことなのでいった意義のあることができ、非常に満足している。

また、たまたまメルボルンで交通に関する国際学会が開かれ、それに参加することもできた。そこでは多くの発表を聞いたり、ブースでは各企業や政府などが取り組んでいる施策を紹介してもらったりなど、非常に勉強になった。また、社会基盤の先生も発表にいらして、予想外のところで再開などもあった。

日常生活

始めは友人を作るのにとっても苦労した。今年RMITに留学したのは東大以外も含め、日本人は私だけだった。しかし他の多くの留学生は同じ国の出身者が複数いて、みんなその友達と一緒に遊んだりしていたので、はじめは全然遊ぶ友人在りなくて大変困った。ただ授業を受けているだけでも講義を聞いてすぐに帰るだけなので友達はできないし、研究所も私以外はみなドクターで、しかもそのほとんどが仕事を経験した、40~50代の人であまり友人という感じではなかった。

そのため私は交換留学生向けのイベントに多く参加したり、そのほかのイベントに参加するなどして友人を増やしていった。また、RMITにあるJapanクラブというところに行

き、友人も増やしていった。また、その友人に誘われてクリスチャンのグループにも招待してもらった(私はクリスチャンではないが)。そのグループでは毎週みんなで集まって夕食を一緒に食べたりおしゃべりをしたりしていて、また時には日曜日に教会に行ったりもした。彼らとは一緒に旅行もしたし、ようやくいい友達ができたと感じだった。

友人の問題が解決された後は、寮の問題が大きく感じられるようになった。

寮は、月 10 万円くらいするところなのにキッチンとトイレ、シャワーが共有で、部屋にはベッドと机と小さい洗面用蛇口があるだけの環境だった。しかも古い建物で、キッチンにはゴキブリが大量、冷蔵庫にもゴキブリや虫の死骸が入っていたり、湯沸かし器の中にゴキブリの死骸が浮いていたり、あとはパン焼きのオーブントースターにもゴキブリが入りしていたりととてもワイルドな環境だった。またネズミもキッチンをはじめ見かけることもあり、壁に隙間があったりするので部屋をきれいにしても部屋にネズミが出てきたりゴキブリがベッドや机の上を歩いていた、部屋の机の上に虫の死骸やゴキブリの糞が落ちていたりすることはある程度日常茶飯事だった。

また、シャワールームもなぜか大量にハエと蚊がいて、シャワーを浴びながら蚊が襲ってきたり、トイレのあと手を洗う時に蛇口に小さい虫が大量に止まりすぎていて蛇口をひねれないとか、あるいは蛇口をひねることができたとしても洗面器(水受け)に大量の虫が止まっていて、水を流した瞬間虫がわっと飛んでくるとか、そういうことは頻繁に起こっていた。

我慢ができずに管理人に相談しても、オーストラリアでは虫がいるくらいは普通だよと取り合ってもらえなかった。そのため、日本から大量にゴキブリホイホイを送ってもらい、キッチンに置いたりネズミを捕るものを買ってキッチンや廊下、部屋に置いたり、また殺虫スプレーを大量に買って、毎日学校に行く前に部屋にスプレーをしたり、シャワーなどをする前にシャワールームにスプレーをしたりという対策を取るほかなかった。(6 か月契約だったので)

それで少しは改善されたが、他の階から虫が来続けるので、本虫が苦手なら、UniLodge というところはやめたほうがいいかもしれない。ちなみに私が滞在していたのは冬～春にかけてです。(夏はもっとひどいらしい)

また、11 月中旬くらい(残り 1 か月半くらい)から、ホームレスの問題に興味を持ち、色々調べ、ボランティアに参加したりホームレスにインタビューしたり、既存団体にインタビューしたりするなどしていった。私と同様の問題意識を持つ人とたまたま出会い、一緒に SNS でホームレスの問題を発信したりするサービスを始めた。日本に帰ってからも、仲間がメルボルンにいる中で日本にいる私だからこそできることを探しつつ、今後どういう活動をしていこうかを考えているところである。

滞在を通して

留学前は、当たり前な価値観や人がどう思うかとかそういうのをとても気にして物事を判断したり、自分の選択肢を狭めたりしていたのだと強く感じるようになった。私の家族はとても保守的で、今まで私は両親が決めた道を歩んできたし、それがいいことだと思ってきた。しかし留学をして、もっと自由に暮らしている多くの友人を見たり、ひとり暮らしで親の目から離れたところに住み完全に全てが自分の責任で行動できるという状況に初めて立ち、もっともっと自分のやりたいこと、興味のあることを自由に追求していいのだと強く感じた。それにより、私の生活は私だけのものだし、人と比べられるものでもないとも考えるようになった。

私は常に人よりも優れていたいと思う節があり、自分より優秀な人を見ると嫉妬したり、悔しいと思ったり私もそうならなくてはと考えたりしていたが、今ではそういう人もいるけど私は違う、私とその人では優れているところが違うのだとよりおおらかに捉えられるようになった。しかしもちろん誰かを目標にしたりするのはいいと思うし、もし自分の強みとしたい分野で人が優れていたら今でもきっとそれに負けないぐらい頑張りたいと思うだろうが、より大きく構えられるようになったとひしひしと感じている。このため、自分に自信が持てるようになったと感じる。帰国後、友人に自信に満ち溢れている感じがするといわれることも何度かあった。

また、フレンドリーなメルボルンに滞在し、多くの国籍の人と交流することでより人に対する興味が今まで以上に増え、もっと友人について詳しく知りたいと感じるようになった。少なからずの友人から、オーストラリアから帰ってからは、よくしゃべるようになったねとも言われた。

最後に

最後に、この充実した貴重な半年間をオーストラリアで過ごさせていただいたことに感謝を申し上げます。OICEの皆様、社会基盤学科の先生方、事務の皆様、先方の事務の方、先生方、また奨学金の業務スーパーや家族友人他すべての方に感謝いたします。ありがとうございました。